

ファロットの誘惑

デルフィニア戦記
12

茅田砂胡

中央公論新社



カバーイラスト

口 絵 沖 麻実也

挿 画

カバーデザイン しいばみつお

(伸童舎)

タイトルロゴ・マークデザイン

水野デザインルーム

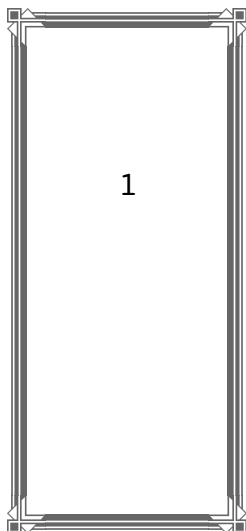
地 図 斎藤 由加

ファロットの誘惑

デルフィニア戦記12

アベルドルン大陸図





王妃はしびれを切らして立ち上がった。

ここで待つように言われてから、すでに一時間が過ぎようとしている。若い神官や小者があれこれと世話を焼き、もてなしてくれていたが、それもそろそろ鬱陶しくなっていた。

窓の外はもう真っ暗になっている。

銀製の燭台に灯された蠟燭が半分燃え尽きようとしていた。王妃の前には干菓子を盛った大きな銀の菓子皿が鎮座している。さすがに調度品もなか

か豪華で神々しい。

部屋を出ようとした王妃の前に、神官たちが立ちふさがり、やんわりと言った。

「恐れながら、妃殿下、大神官さまがお戻りになるまで、こちらでお待ちいただくようにとのお言伝でございます」

王妃は鼻を鳴らした。

大神官は自分を迎え入れておいて、真っ青な顔をして飛び出していった。どこへ行ったかも何をしに行ったかも見当がつく。

騒ぎになることは容易に想像がついたが、それは別にかまわない。戻ってくるまで待つつもりでもいいが、もともと気の長いほうではないのだ。

「いいかげん待ちくたびれた。神殿の見物でもする。誰か案内してくれ」

若い神官たちは戸惑い顔になった。

決して眼を離すなど言い渡されていたのだろうが、何と言っても相手は『王妃』だ。

不安げに互いの眼と眼を見交わしている。

王妃はそんな彼らを押しつけて勝手に歩き出した。若者たちは慌てて上司に報告しに走り、主立った神官たちが駆けつけて、王妃の後にぞろぞろ続いた。夜の神殿は明かりなしではとても動けない。

莊嚴な空間をつくりだしている石造りの礼拝堂、別棟にある見習い神官たちの修行の場である学院や食堂、数々の蔵書を取めた書庫など、さすがに清しいつくりだが、贅沢を廃しているため、掛け燭台の設備がほとんどないのだ。

王妃は内部を一通り見て回ると礼拝堂に戻り、しげしげと上座の祭壇を見やった。

ここで自分とあの男は『茶番劇』を演じたのだ。

このただ広い空間は、あの時、数百人の招待客で埋め尽くされていた。今は咳払いしても響きわたりそうなほど、しんと静まり返っている。

石造りの天井は床から恐ろしく離れた高みにあり、首が痛くなるほど見上げなければならない。吸い込

まれそうだった。

礼拝堂の一番後ろ、左端に小さな木戸があった。後ろからついてきた神官が説明する。

「塔に続く階段の入り口です」

「上には確か鐘楼があつたな」

「はい。日々の勤めとして、朝夕に鐘を鳴らします。コーラルでももつとも高い塔ですが、あいにくこの時間では、昇っても景色は何も見えないと思います。——ご覧になりますか？」

王妃は首を振った。景色を眺めに来たのではない。礼拝堂には地下へ続く階段もあった。石の階段を下りたところに檜材の立派な扉がある。

重そうな鉄の錠前が下がっていた。

「この中は？」

「恐れ入ります。ここは、定められたときしか入ってはいけないことになっていますので……」

見学はご遠慮いただきたいとやんわりと訴えたが、そんな説明でこの王妃が引き下がるわけがない。

「鍵はどこにある？」

しかつめらしい顔立ちの神官は、規則ですからとあくまで抵抗したが、王妃は錠前を手に取り、重さを確かめている。

「ずいぶん嚴重だな。何か見られたくないものでも入ってるのか？」

「とんでもないことでございます」

痛くもない腹を探られてはかなわないと思ったのか、すぐに鍵が運ばれてきた。

扉の向こうは真の闇だった。地下にしては空気は澄んでいて、息苦しさも黴臭さも感じない。清掃と空調が行き届いているらしい。

小者たちが闇の中に手燭を差し出すと、そこには眼も眩むほどの、きらびやかな光景が広がった。

金の杯や大皿、宝石のついた錫杖、豪華な刺繍を施した袈裟など、これまでに寄進されたものらしい宝物が陳列台の上にずらりと並んでいる。

王妃は呆れたように鼻を鳴らした。

「神殿つてのはずいぶん儲かる商売らしいな」

「恐れながら、神を敬うことは、人々の功德を積む善行にございます」

「神殿に寄進すれば神様を崇めることになるのなら、神様は貧乏人にはひどく冷たいんだろうな」

神官たちのいやがりそうなことを平然と言う。

地下蔵を見渡していた王妃の眼が奥に向けられて止まった。そこはちやうど祭壇の真下に当たる部分だったが、緋色をした巨大な天鵝絨の緞帳が、壁の一面をすつぱりと覆い隠している。

王妃は小者から手燭を取り上げ、まっすぐに奥へ歩いていった。

「妃殿下！ お待ちを！」

慌てて止める声を無視して、無造作に緞帳をめくってみる。

当然壁だろうと思われたそこは、鉄格子になっていた。優美な蔓草模様の鉄柵である。しかし、この格子が閉じこめているものは極悪人でも犯罪者でも

なかった。生き物でさえなかった。

では、かつての英雄の棺ひつぎかと言えば、それも違う。

格子の向こうには何もなかった。石壁に囲まれた牢獄のような空間がばかりと空あいている。

ただ、正面の壁、床から一メートルほどの高さに小さな扉がつくられているだけだ。

人が入るほどの大きさではない。背後の石をくりぬいてつくった、物入れのような感じだった。

しかし、観音かんのん開きの小さな扉は七宝しっぽうで装飾されているし、蝶ちょうつがい番も黄金で鍍金めっきされ、物々しい錠前も黄金に輝いている。さらにその上、人が近づけないように鉄柵を設け、天鵲絨の緞帳で覆ってあるのだ。ただの物入れであるはずがない。

「あの中には何が入ってるんだ？」

息を詰めていた神官たちは沈黙を持って答えた。

「この柵の鍵はどこにある？」

王妃に正面から見据えられて、致し方なく彼らが

語ったところによると、この中に入れるのは大神官のみだという。格子の鍵も、壁の扉の鍵も大神官が管理しており、自分たちは鍵のある場所も知らないというのだ。

王妃は感心したように言った。

「よっぽど豪華な物が入ってるんだな。他の宝物はこうやって出しっぱなしにしてるのに」

「いいえ。安全を考えてのことでございます。火の管理は万全を期しておりますが、万が一と言うこともございますので……」

王妃はにやりと笑った。

「つまり、燃えたら困るものが入ってるわけだ？」

蒼くなった神官たちが王妃を止めようとした時は、もちろん手遅れだった。

星明かりの中、全速力で馬をとばした国王がオーリゴ神殿にたどり着くと、玄関前は騒然としていた。

明かりを持った若い神官が何人も右往左往している。いやしくも神に仕える身であるからには、軽々しく取り乱したりしてはならないはずだが、よほどの異常事態が起こったらしい。

彼らは大神官の帰りを待っていたらしいが、馬蹄の響きと共に駆けつけてきたのが国王だと知ると、泣きそうな顔に安堵と不安と畏れとを浮かべ、取りすがらんばかりにして訴えた。

「国王さま！ お早く……！」

「お願いでございます。妃殿下をお止めください！ 我々にはもうどうすることもできません！」

悲鳴のような懇願とともに、彼らはせき立てるようにして、国王を礼拝堂の地下に案内した。

そこで国王が見たものとは言えば、床に倒れて転がる何人もの神官と、引きちぎられた緋色の緞帳、そして開け放たれた鉄格子だった。

「リィ!!」

七宝で飾られた扉に剣を突き立てようとしていた

王妃が振り返った。

にこりと笑って言う。

「早かったな。大神官はどうした？」

まったく普通の語調である。盛大に文句を言つてやろうと思つていた国王は毒気を抜かれた。

「おつつけやってくる。いったい全体、この有様は何事だ。彼らに何をした？」

「殺しちゃいない。あんまりうるさいから当て身を入れただけだ」

王妃は小者から取り上げた手燭を陳列台の上に置いて、照明にしていた。

国王の横では道案内をした神官が、同じく手燭を持ったまま凍りついている。

「リィ」

国王はできるだけ慎重に切り出した。

「大神官から話は聞いた。お前が——俺との離婚を望んでいると」

「別にかまわないだろ？」

あつげらかと王妃は言つた。

「本当の夫婦だったわけじゃないんだ。もつと早くこうするべきだったよ」

国王は言ひようのない焦燥しょうそうを感じた。その正体をどう話せば納得してもらえるのか、必死に考えた。

「確かに、お前の言うとおりかもしれん。俺たちは茶番を演じたのであつて、契くわりを結んだわけではない。しかし、離婚となるとそう簡単にはできないし、そんなことを俺に一言の相談もなしに決められては困るのだ。おまけにこの狼藉ろうぜきは何事だ？」

王妃は手にした剣先で、石壁に填め込まれている七宝の扉を差してみせた。

「おれもこんな乱暴なこととはしたくなかつたんだが、たぶん、この中なんだ」

「何が？」

「今年の春におれたちが名前を書いた紙切れだ」

蠟燭の明かりだけが頼りなげに揺れる地下室で、国王は何ともいえない顔で自分の妻を見つめたのだ。

その程度のことなのだ。この娘にとっては。

あの時、結婚式の途中にタンガの侵攻を知らせる報告が届き、自分たちは証書に署名する間もなく、この神殿を飛び出した。

ランバーでの戦いを終えて凱旋がいせんした時には、市民たちはもう自分たちが正式に結婚したものと思つてゐた。すでに王妃と呼ばれてゐたリイも、またあんな大仰な衣裳を身につけるのはまっぴらだと言つた。そこで、数名の証人を立会人として、この神殿で、平服のまま署名した。この時点をもつて、ウォル・グリークとグリーンディエタ・ラーデンの結婚は正式且つ、法的に成立したのである。

このとき、国王にわずかに遅れた大神官が地下へ駆けつけたが、そこに累々るゐると倒れている弟子たちを認め、格子の内側にいる王妃を見て、絶句して立ち竦んだ。

その王妃はこれ幸いとばかり、大神官に向かつて言つたのである。

「よかった。帰ってくるのを待ってたんだ。この鍵はどこにある？」

「待て!!」

国王は満面を紅潮させて、王妃に詰め寄った。

「いったい何を考えている!? 結婚証明書を焼き捨てて、それで離婚したことになると思うのか!」

「ならないのか?」

王妃は不思議そうな顔だった。

「人はおれとお前を夫婦だという。その根拠はあの紙切れだけだ。だったら処分してしまえばいい」

「だから待てと言うのだ!」

国王は深く息を吸って、呼吸を整えた。

たとえ名ばかりの夫婦でも、愛していないくても、それとこれとは話が別である。

「いいか、国王に離婚は許されていないのだ。それ以前に、俺はお前を失うつもりはないぞ」

「失う?」

王妃は怪訝な顔である。

「それは話がおかしい。王妃をやめてもおれは当然ここにいる。タンガとパラストの動向も気になるし、一度始めた喧嘩を途中で投げるわけにはいかない。だからお前はおれを失うことにはならない」

「いや、しかし!」

「ただし、迎えが来たら、そのときはお前ともこの世界ともお別れだ。おれは相棒のところへ帰る。何度も念を押したはずだぞ」

一瞬、言葉に詰まった国王だった。

自分たちをつなぐ絆のはかなさを思い知らされた気がしたのだ。

「では、それでは、迎えが来たわけでもないのに、離婚しなければならぬ理由は何なのだ!」

「おれも聞きたい。おれが王妃でなければならぬ理由とは何だ?」

国王はちよつと言葉に詰まった。そんな国王に王妃はたたみかけるように言う。

「お前は『迎えが来るまではここにいてほしい』と

言った。おれは実際そうしてきた。これからも——お前と離婚しても、戦士としての助力は惜しまないつもりだ。どうしてそれじゃいけない？」

国王は絶望的な表情で両手を広げた。

「リイ。頼むから質問に答えてくれ。離婚の理由はいつたい何だ？」

「ポーラがお前を好きだと言ってる」

「……」

「お前も彼女を気に入ってる。理由はそれで充分だ。どう考えても、おれの存在が邪魔なんだ」

「わかった。ならば話は簡単だ。俺が彼女を愛妾に迎えるのをやめると言えばいいのだな？」

王妃ははつきり顔色を変えた。

緑の瞳が壮絶な光に煌めいた。

「馬鹿も休み休みいえ。一度申し込んでおいて取り消すなんて、男のやることか！」

「致し方ない。この際、後ろ指を指されてもやむをえん。ポーラどのにはまことに申し訳ないことをし

てしまうが、そのポーラどのとて王妃を追い出して後釜に座ることなど望むはずがない！」

「だけど現実におれがいるから、ポーラはこの話を断ると言ってるんだ！」

石造りの地下室である。二人の叫び声は割れ鐘のようにわんわん響いた。

「いくら形だけのことだとは言っても、この結婚は結局お前の自由を縛りつけている。そんなのはいやなんだ。おれが王妃をやめれば、お前は本当に好きな人と結婚できるだろう？」

「リイ。だから俺は『好きな人との結婚』など考えたことはないのだ。それは俺の自由になることではない！」

「そんなに簡単に諦めることはない」

「いいから話を聞け！」

少し落ち着きを取り戻した国王が言う。

「理屈で言えば誰でもよかった王妃の地位だ。なぜお前でなければならぬのかと言ったな？」

「ああ」

「俺は何か確証が欲しかったのだ」

王妃には意味がわからない。訝^{いぶか}しげな顔になった。

「お前は……俺のよき理解者であり、同盟者であり、デルフィニアの守り神だ。しかし、お前はいつか己のいるべき世界に帰ってしまう。頭ではわかっているつもりだった。誰だろうと、どんな生き物だろうと、慣れ親しんだ環境で暮らすほうが望ましいに決まっている。そうわかつてはいても、できるだけ『いつか』の話にしておいて欲しかったのだ」

王妃は眼を丸くして、目の前の男を見つめていた。ずっと昔に、そっくり同じことを言われたことがある。

そこにいるのが当たり前だと、一緒にいることを当然だとは少しも思わない。運命は誰にも読めないものだから、いつ別れが来てもおかしくない。

だから、今のこの時間が大事なのだと真顔で話し

た。

姿形はまったく違うのに、眼の前の男が、懐かしい相棒に重なつて見える。

国王は王妃の反応には気づかず、話し続けている。「お前にとつては邪魔なだけの代物だろうが、王女の地位を与えたこともそうだったのだが……王妃の称号を与えることで少しでもその、こんなことを言うとは今度こそ喉笛を食いちぎられるかもしれないとお前をここに——つなぎ止める重石^{おもし}になればいいと思つたのだ。情けないと笑つてくれてもかまわん。それが嘘偽りのないところだ。時間^{とき}が限られているならなおのこと、期限が来るまではもつとも近くについて欲しいと、そう思つた」

国王は珍しいくらい早口で一氣に言つた。

王妃はしばらく黙つていた。

国王も黙つて、相手の反応を待つていた。

王妃は困つたような眼を相手に当てて、ちよつと笑つた。

「お前はほんとにいいやつだよ」

しみりした口調だった。

「お前は一度もおれを殺そうとしなかった。一度もおれから逃げなかった。こっちへ来てからずいぶん自分本位に振る舞ってるのにな。並の人間だったら少なくとも五回は『化け物』と叫んで、おれに斬りかかっているとこだ」

「……」

「正直な話、お前がどうして、こんなにおれによくしてくれるのか、わからないんだ」

「わからない？」

頓狂な声で叫んだ国王である。

「初めて会った時、まったく見ず知らずの俺の命を救ってくれたのは誰だ？ 一人の味方もいなかった流浪の俺に惜しみない助力を与えてくれ、父を救うために生きて戻れないかもしれない北の塔へ潜入してくれたのは？ 圧倒的に不利だった国王軍を勝利に導き、俺に再び王冠をかぶせてくれたのは誰なの

だ？ つい先日、たった一人で獅子の檻おりの中に飛び込んでくれたのは？ 俺はお前に多くのものを借りてこそすれ、何一つ返してなどいないぞ」

王妃はまた微笑した。

剣を腰に収め、扉の前から離れて格子をくぐる。

国王に歩み寄り、間近からその顔をのぞき込んだ。
「アマロックの言ったとおりだ。人間も捨てたものじゃない」

「……」

「人間なんかどうなったってかまやしないはずなのにな。お前のためなら何でもしてやりたいよ。敵がいるなら一緒に戦う。お前が守りたいと思うものはおれも守る。おれの命も剣も、本来なら相棒のものだが、要りようなら貸してやる。ここにいる間は」
王妃の笑みは何ともいえないものだった。

「だけど、いいか。お前を抱いて慰なぐさめてやることは、おれにはできないんだ」

「わかっている」

領いた国王だった。

「今さら言われるまでもなく、わかっている。俺がお前に望むのは、そういう種類の愛情ではない」

「だけどお前は成人した男なんだから、そういう種類の愛情も必要なんだ。いらないなんて言うなよ？ 変態と呼んでやるからな」

額を押さえて立ちつくした国王だった。しかし、口元には笑みがある。

「役職上、女性には不自由していないつもりだが、それではいかんか？」

「いかな。それは一時の快楽であつて、幸せじゃないだろ？ 楽しむとは言わないけどな」

悪戯いたずらっぽく笑つて付け足した王妃である。

「お前ももっと個人的な幸せを持ったほうがいい。妖艶な貴婦人と恋のかけひきをするのもいいけど、もっと気持ちの暖かい、お前に誠意を示してくれる人と一緒に、本当にくつろげる安らぎの場を持ったほうがいい。国王として国民の自由と誇りを守るの

もいいけど、男一匹として奥さんや子どもを大事にすることを覚えるのもいいもんだぞ」

国王は相変わらず笑っている。

「十七のお前が、妙に年寄りじみたことを言う。家庭を持ったことがあるわけでもあるまいに」

「仲間が連れ合いを持つて、いいほうに変わるのを何度も見てきたからな。お前は特に国王なんて厄介な立場にあるんだから、慰めは必要だ。ポーラならうつつけだよ」

言い様のない苛立ちに襲われて、国王は声を荒らげた。

「だから何度も言っている。俺はお前を失いたくはないのだ！」

「だからなくしたりしなとは言ってるだろうが!!」

堂々巡りである。

そこへうんざりした声が割って入った。

「いい加減にしてください」

蠟燭の明かりに照らされたバルロの顔は、口調と

裏腹に真剣だった。

「先日は青の間、今度はオーリゴ神殿。夫婦喧嘩も結構ですが、周りの被害を考えてくださるようにと申し上げたはずです」

王妃が冷静に言い返した。

「今回はまだどこも壊してない」

「あなたの足下に転がっているのは何です？」

ようやく息を吹き返した神官たちが身じろぎする。

国王の横で硬直していた大神官が急いで駆け寄り、抱き起こしてやった。咎めるような眼を向けられて、さすがに王妃も視線をはずした。

バルロが太いため息をついて言った。

「こんな暗いところで言い争わなくても、喧嘩なら上で堂々とやっていたくださいましう」

夫婦の片方だけが離婚したいと言っている場合の離婚調停は、それでも難航するのが普通だが、

今回はまさに極めつけだった。

事情を知った人々が次から次へと神殿へ駆けつけ、日頃は落ち着いた静けさを誇る神殿は喧々囂々たる論争の場になり、大神官は頭を抱えてしまった。

王妃の決意を何とか変えさせようと躍起になったのは、当の『夫』よりも、その臣下にして友人でもある人々のほうである。

バルロはもちろん、イヴンも、ナシアスも、この緊急事態に驚いて駆けつけてきた。ロザモンドまでやってきた。

どうやらこの情報は王宮全体とまでは言わずとも、一の郭中を駆け回ったらしい。

アヌア侯爵も沈痛な顔である。ヘンドリック伯とドラ將軍は軍事演習のため外出していたが、これを知ったらどんな形相になることか、想像に難くない。

侍従長は長年の肩の荷を降ろした安堵から一転、絶望の淵に叩き落とされてほとんど錯乱状態である。足下はおぼつかず、話す言葉は誰も聞き取れない。

女官長と宰相もこの場に飛んできたかったに違いないが、どうしても王宮を留守にできないらしく、腹心の部下を差し向けてよこした。

彼らは総勢で王妃を取り囲んで、大仰に言うなら吊し上げた。それぞれ手を変え品を変え、声を囁^からして説得に当たり、叱責から脅迫、泣き落としまで駆使したが、王妃は決心を翻^{ひる}さなかつたのである。

真っ先に両手をあげて降参したのは国王だった。

「いかん。埒^{らち}があかん」

気がかりだが、国王にはそう長く執務室を空けていられない事情がある。自分自身で王妃を説得することはひとまず中断し、もっと現実的な対処をとつた。宝物庫に厳重に見張りをたてるように命じ、アヌア侯爵と大神官とを呼んで疑問を投げた。

「結婚証書を破り捨ててしまえば、離婚したことになるのだろうか？」

二人とも頭を抱えてしまった。

難しい問題である。何しろ前例がない。

焦燥の色の濃いアヌア侯が、ためらいながら言う。「離婚が成立するとは思えませんが、結婚の事実が消滅することになるのではありませんか？」

契約書の紛失した契約が無効になると同じことだ。互いの意志で結婚を破棄するのではないにせよ、夫婦だと証明する根拠^{もと}が何もないことになる。

しかし、大神官は顔色を変えて反論した。

「とんでもないことでございます。お二人はこの誓約の神殿におかれまして、立会人の同席の下に、夫婦となることを誓われました。証書が消失しても、その事実^{じじつ}は決して消えるものではありません」

「その厳肅^{げんしゆく}な事実を王妃が呑み込んでいてくれればいいのだがな」

国王の口調もだいぶん、ぼやきに近い。

決して王妃から眼を離さぬようにと言い残して、国王は王宮へ戻っていった。

一方、大挙して押し寄せた『説得部隊』も、敵の頑強な抵抗と堅固な防壁にどうにも歯が立たない。

へとへとになり、ひとまず小休止していたが、男たちが別室に引き上げた時も、ロザモンドだけは青い顔をして王妃の傍に残ったのである。

二人になると、王妃のほう心配そうな顔になり、そつと話しかけた。

「夜更かしはおなかの子によくないよ。早く帰って休んだほうがいい」

「あなたがこの馬鹿げた提言を撤回してくださいれば、すぐにでも大いびきを掻いてみせます」

突然の事態に青ざめてはいても、そこは大家の当主だ。毅然とした態度で訴えた。

「私のことなどより、お願いですから陛下のことをお考えになってください」

「考えてるさ。だから離婚するしかないと思った」
ロザモンドは血の気の引いた唇を咬んだ。

「あなたはこの問題を簡単に考えすぎます。市井の男が妻を離縁するのはわけが違い、国王に離婚は許されていません。王妃とはそう安易にすぐ替えら

れるものではありません。国王が新しい王妃を迎えることがあるとしたら、前の王妃が亡くなったときだけです」

「そうか。じゃ、おれの葬式でも出すか」

「妃殿下!!」

息卷いたロザモンドだが、王妃は聞いていない。相変わらず美しい、男装の女公爵に笑いかけた。

「だってさ、ロザモンドは団長が好きだから一緒に寝たんだろ?」

ベルミンスターの女当主は何とも言いがたい顔になった。

どう言い返したらいいのかわからない様子である。そんな女公爵を見つめて、王妃は優しく言った。

「いいんだよ。それでいいんだ。ロザモンドは女で、団長は男なんだから、そうなるのが当たり前なんだ。

だけど、おれの場合は事情がまるで違う」

「……この間の話の続きですか?」

「そうだよ」

「あなたは、陛下をお好きだと思っていました」

「好きだよ」

大真面目に王妃は答えた。

本当はそんな言葉でも足らない。

愛していると言つてもいいくらいだ。

「あいつは人間にしておくのがもったいないような人間であることが信じられないような極上品だよ。失いたくないっていうのはむしろ、おれの台詞せりふだな。それでも、ロザモンドがしたような愛情の表現は、おれにはできない」

「……どうしてもですか？」

「どうしてもだよ」

「絶対に？」

「絶対に」

ロザモンドは困惑して頭を振った。

「私にはわかりません。それならどうしてご結婚を

……」

「そこが根本的に間違つてゐる。おれたちがしたのは

結婚じゃない。ただの茶番劇だ」

女公爵が絶句していると、王妃はさらに言った。

「一緒の寢床に入るほど仲良くしたいわけじゃない。ナシアスはおれの質問に顔色を変えてたが、団長もイヴンも同じような反応をするだろうよ。ずいぶん乱暴な話だからな。大の男がそんなこと言われたら、怒りのあまり摔倒するぞ」

「それは……それこそ彼らと妃殿下とは違います。一緒にすることはできません」

「どう違う？ 同じようにウォルの傍にいて、同じようにウォルが好きなのに？」

「妃殿下は女性ではありませんか！」

その『妃殿下』は珍しいものでも見るような眼でロザモンドを見た。

怒りより焦燥より、その瞳にはむしろ、哀れみに似たものが浮かんでいる。

なるほど相棒の言つたとおりだ。

人間はあくまで外見で相手を判断し、その印象に

おもしろいくらい左右される。その姿の中にどんな魂が収まっているのかまで見抜くことができない。

今は不本意な身体に閉じこめられてしまっているグリーンディエタ・ラーデンは、頬杖ほおづえをついて、しみじみと首を振った。

「元の身体に戻ればなあ……。そうしたらこのおれは死んで、代わりに男のリイがウォルの傍にいることになって、そのウォルにはちゃんとした本物の王妃を迎えて、万事めでたしめでたしなのに……」

あの指輪がここにはない。

第一、自分は『姿替え』の術など知らない。

思索にふける王妃とは対照的に、ロザモンドは憤然げんと言った。

「悪い冗談はおやめください。あなたが男だったら私もサヴォア公もあなたを陛下のお側に近づけたり致しません。あまりにも危険すぎます」

王妃は驚いて顔を上げた。

バルロが以前、同じことを言った。あなたが女で

よかったと。形ばかりでも従兄あにうえ上の妻であることに安堵すると。

『妻』は『夫』に従い、忠実であるものだから、あなたが従兄上に造反することはない。少なくとも世間の人々はそう考えるだろうからと。

自分がどうしてこんな身体になったのか、今まで深く考えたことはなかった。仲間の誰かのいたずらだろうと思っていた。

魔法街の老婆は、自分がここへやってくることは運命だったのだと、決められていたことだと言った。

とんだ災難だが、得るものもあった。人間に対する考え方が変わったこと、特に嫌悪感が薄くなった。それはすべて、あの男と出会ったからだと思う。

しかし、あの男は国王という身分である。社会の頂点に立ち、あらゆるものを随したがえる立場である。

誰もその存在を凌駕りやうがしてはならないのだ。

あの男や周囲の人々と衝突せずに行動を共にするためには、それも長期に亘わたって一緒にいるからには、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。